

福島県でコバノヒルムシロを採集

薄葉 満*

関西地方を主分布域とするコバノヒルムシロ *Potamogeton cristatus* Regel et Maack. が宮城県まで北上していることは、1922年に採集された飯柴栄吉の標本（大阪市立自然史博物館所蔵）などによって早くから知られていた。したがって、その南に位置する福島県にも自生地があつてしかるべきであるが、これまで採集されたものはどれもホンバミズヒキモばかりで、少なくとも近年の研究者によって見出された形跡は全く無い。ただ、過去に牧野（1891）が「Iwaki:Yumoto」と、また松村（1905）が「Aidsu (Iwashiro)」と記しているのを、福島県植物誌編さん委員会（1987）や上野（1991）はこれを確かな文献産地として取り上げている。それは、すでに薄葉（1987）が引用したように、コバノヒルムシロという和名はもと松村任三によって与えられ、牧野（1890）が「瘠果ハ著シキ柄ヲ有シ、背ハ平行ナラズシテ嘴脊ヲナス」個体にそれをあて、他のミズヒキモ類との混同を避けたという経緯を重く見たからである。しかし、私はまだそれらの標本に接することができずにいる。また、角野（1994）が日本の主要なハーバリウムの標本を基に作成した分布図にも福島県はプロットされておらず、それらの記録は今もって文献産地のままである。

ところが、私は1994年8月27日、いわき市四倉町中島地内の水田灌漑用溜池で期せずして本種を採集することができた。その溜池は海拔40m、深く入り組んだ谷津田の最奥に位置しており、通年沢水を湛えて水の枯れることがない。また、流入部に浅瀬を有し、抽水・浮葉・沈水植物が調和を保って生育する安定した溜池で、ヨシ・カンガレイ・ショウブ・ナガエミクリ・アシカキ・ヒツジグサ・オヒルムシロ・フサモ・イヌタヌキモなど多種類の水生植物がみられる。1993年9月11日に測定した池水のpHは6.5（堀場製作所、コンパクトpHメーター、B-111）、導電率は0.06mS/cm（堀場製作所、コンパクト導電率計、C-173）で、Kadono（1982）が報告したコバノヒルムシロ自生地の値と比較して大差がない。

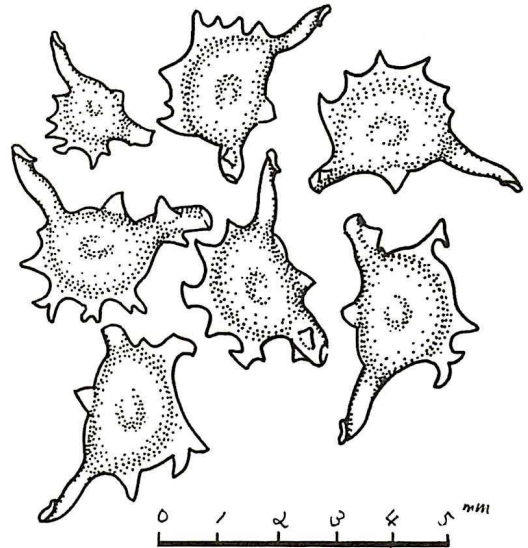


図1 コバノヒルムシロの果実（いわき市四倉町中島産）

果実を見ると、嘴状に宿存する花柱の長さは1~1.5mm、背部のとさか状突起は高さ0.5~0.6mm（稜の高さを含めると0.6~0.8mm）、極めて不揃いで中には先端が2岐するものもある（図1）。とさか状突起は、手持ちの兵庫県産の標本と比較するとかなり太短く、また牧野（1891）や三木（1937）の図ほどの長さも整一さもない。しかし、皮下韌皮束（三木，1937）を欠く茎の内部構造や腹部に1個、果柄にも2個ある角状突起がコバノヒルムシロの特徴を如実に示している。

太平洋に面するいわき市はほぼ東半分がヤブツバキクラス域に含まれ、多くの暖地系植物の北上する、福島県で最も温暖な地域である。これで東北地方では2つめの標本産地が明らかとなり、町名は異なるものの前述した牧野（1891）の記録もにわかに現実性を帯びるものとなった。コバノヒルムシロは、『我が国における保護上重要な植物種の現状』（日本自然保護協会，1989）では危急種にランクされている。今回、分布の中心から遠く離れ

*970 福島県いわき市平中平窪1-16-3

た東北地方で健全な自生地が新たに見出されたことは、その点でも意義あるものと思う。なお、採集標本は東京都立大学付属牧野標本館(MAK)に寄贈する予定である。

文 献

- 牧野富太郎, 1890. *Potamogeton hybridus* Michx.
ハ果シテ草木図説ノみづひきもナリヤ. 植物学雑誌
(42): 302~303
———, 1891. 日本植物誌図篇 第1巻第9集. 敬
業社.
松村任三, 1905. 帝国植物名鑑 下巻. 丸善.

三木茂, 1937. 山城水草誌. 京都府史蹟名勝天然記念物
調査報告 18: 1~127.

Kadono, Y., 1982. Distribution and habitat of
Japanese *Potamogeton*. Bot. Mag., Tokyo 95:
63~76.

薄葉満, 1987. 福島県の興味ある水生植物Ⅲ. フロラ福
島 5: 5~11.

福島県植物誌編さん委員会, 1987. 福島県植物誌. 福島
県植物誌編さん委員会.

上野雄規, 1991. 北本州産高等植物チェックリスト. 東
北植物研究会.

角野康郎, 1994. 日本水草図鑑. 文一総合出版.

香川県にボタンウキクサ

久 米 修
(香川植物の会)

ボタンウキクサは、熱帯アメリカ原産のサトイモ科の
水草で、昭和初期に園芸用に輸入されたものから逸出し
たのが日本での帰化植物としての始まりと言う(浅井,
1984).

香川県ではこれまで、栽培以外に野生化した記録はな
かったが、1994年9月6日多度津町道福寺大関「上池」
において、香川植物の会会員の貞広昭美氏が採集したも
のが筆者に届けられた。筆者は9月10日に現地を訪ねる
機会があり、溜め池への流入口に繁茂する一群のボタン
ウキクサを確認することが出来た(写真参照)。1994年
は記録的な渇水で、この溜め池の水位も著しく低下した
ためか、広島県の明鏡調節池で報告された(下田, 1992)
様な大繁茂はその後見られなかった。また大滝・石戸
(1980)によれば、本種の越冬は困難とされていること
から、1995年2月12日現地確認を行なったところ皆無の
状態となっていた。

これに引き続き香川県内では、

1994年9月24日高瀬町比地中井ノ口「国市池」(5株)

1994年11月5日牟礼町大町羽間「羽間中池」(約50株)

においても、ボタンウキクサの生育を確認した。

ちなみに、多度津町「上池」と高瀬町「国市池」につ
いては、1982年以来毎年継続的に水草調査を実施してい
るが、これまでボタンウキクサは確認していなかった。



その後、1994年11月に高松市内の園芸店において、ボ
タンウキクサとサンショウモ(オオサンショウモではな
い)が販売されているのを見かけた。ボタンウキクサは、
香川県内には園芸用に相当出回っている様であり、今後
逸出する機会が増加するものと思われる。

参考文献

- 浅井康宏, 1984. 日本でふえている水生の帰化植物. 採
集と飼育 46(7): 289-293.
大滝末男・石戸忠, 1980. 日本水生植物図鑑. 北隆館.
下田路子, 1992. 西条盆地(広島県)のボタンウキクサ.
水草研究会会報 46: 5.